



Title	中国人の語る日本人の死生観
Author(s)	林, 思憶
Citation	基督教學, 52, 29-32
Issue Date	2017-07-07
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/70086
Type	article
File Information	02lin.pdf



[Instructions for use](#)

中国人の語る日本人の死生観

林 思 憶（リンシヨク）

研究動機・前提

「他人の目から見る自分」は従来、面白いテーマである。本当の自分はどんなものなのか、他者の目を通して自分のことを見つめるのは一つ可能なアプローチとなる。しかし、正しいか間違っているかとは別に、他人の語る自分は結局、自分の思っている自分とは大きくずれてくるのが常にあるし、バイアスがかかっていることも時々ある。そこで、両者を並べて照らし合わせて、より客観的で厳密な研究が求められる。これによって、新しい自分の像がそのうち鮮明に現れてくるだろう。中国人が語る日本人の死生観を研究することで、日本と中国のお互いの他者表象を明らかにし、持っているイメージを再構築することが望まれる。

研究方法

今回の研究は量的研究ならびに質的研究を組み合わせることで、中国人が語る日本人の死生観の現状について分析を行っていくことにする。量的研究とは、中国（台湾・香港・マカオを除く）で発行されている学術雑誌、重要な新聞、学位論文、学会論文の検索を行うことができるデータベース・サービス「知網」CNKIや定期刊行物を収録しているデータベース・サービス「万方数拠」などから、日本人の死生観に関する研究の客観的なデータを抽出・分析し、その研究の動向と頻度を絞り出して把握する。一方、質的研究は、具体的な研究結果の自身を通して、死生観研究の実態について分析する。

日本人の死生観を語る際のステレオタイプ

（一）量的調査から見る研究のアプローチ

研究のアプローチとして、中国人研究者が日本人の死生観を解読する際によく目に映る視点はいくつかある。文学者やその作品に焦点をあてている研究（七九件）、日本の映像作品、映画やドラマを手掛かりにして、映像

表現から日本人の死生観を解き明かそうとしている研究（一〇件）、そして日本の文化的象徴、すなわち文化的シンボル桜や武士道精神などに注目し、死生観の問題について分析的な思考を行っている研究（一八件）、そのほか、自殺、安楽死、脳死問題や生命教育といった日本社会における注目的な社会倫理現象に目を向けて、日本人の死生観という答えを探っている研究（六件）、神道や仏教を中心に宗教の立場で取り扱っている研究

（六件）などが挙げられる（図1）。

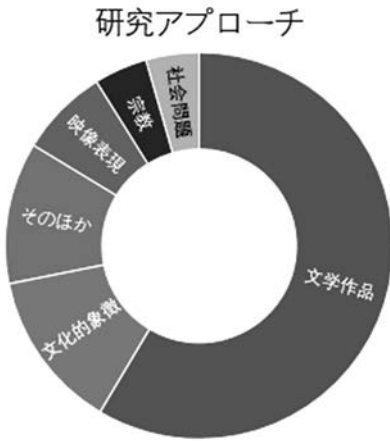


図1

こういったアプローチのなか、日本人作家そして彼らの作品に焦点を当てた死生観研究は研究全体の過半数を超える七九件（五八・五％）を占めているのであり、極めて注目すべきものである。勿論ほかのアプローチも多数存在しているが、ここで言えるのは日本人の死生観をめぐる中国人研究者の研究の大半は、文学における死生観論であり、個別の作家や作品を扱う研究において展開されることが多い。

（二）質的研究から見る日本人の死生観についての見地
また中国人研究者による典型的な日本人の死生観論がいくつか見られる。たとえば死を回避せず積極的に受け入れ、死に向かったまま生きていくなど。どのアプローチを通して、多くの中国人学者が大体似たような結論に達する。次は生と死の距離、美しい死への追求、恥文化としての自殺観念という三つのテーマから、中国人研究者は日本人の死生観をどういうふうにとらえているかについて検討していく。

まず、生と死の距離、あるいは生と死の関係について以下のように主張している中国人研究者が多い。楊本娟

(二〇一一)によると、日本文化には独特な死生観があり、死は生の一部として永続的に存在しているという。生と死は完全な対立でなく、死は生の存続である。ここで日本人の靈魂觀念が取り上げられ、死んだあとの靈魂は引き続き他界で活動したり、国やふるさとに帰ったりすることができると語っている。したがって死は終わりを意味するのではなく、新しい旅への出発なのである。王玉芬(二〇一三)は『ノルウェイの森』におけるさまざまな死の場面を解説し、死は生の対極としてではなく、その一部として存在していると語っている。「食事や就寝と同じように、死のなかには悲しみを含みながらも、永遠に消えることがない。もう一つの形でこの世に存在を示している」と王は主張する。いわゆる死への親近感を抱き、生を大切にすることで死に対しても価値を認める。このように、数多くの中国人研究者は「生死を恐れることなく、生死を寛容し、生死を尊ぶ」や「生を尊び、死を大切にする」といった日本人の死生観を導いた。

第二に死の美しさやロマンチックなところに焦点を当て、日本人に特有な死への親近感を語っている中国人研

究者もたくさんいる。張麗晶(二〇〇八)は自分の研究において、日本人の国民性には死に対する特殊な感情、すなわちある意味で死をロマンチック化するという行為が存在しているという。張は川端康成、三島由紀夫や芥川龍之介などの日本人作家を取り上げ、死は彼らにとって完璧なものであり、立派な芸術であると説きつつ、死によつて極端な美への追求を実現しようとしている一部代表的な日本人の実態を考察している。また「死の美学」に注目している湯春萍(二〇一二)は、『失楽園』の主人公の互い心中を一瞬の閃きに永遠の静寂を手に入れようとする手段として解釈し、死を果たしたことによつて平凡な日常生活を超えた死の輝きが見出されるという。さらに湯は日本人の「虚無」と「物の哀れ」を強調し、「世の中の無常により、主人公らがいのちを燃やし尽くしていくうちに、「いま」や「この瞬間」を極力、捕まえようとする」、そして「計画された美しくて完璧な死にこそ、いのちにとつて最もふさわしい居場所がある」と。このように中国人研究者は日本人の死生観を「純粹の極み、美しさの極み」と捉えているのも極普

遍的である。

最後に、武士道精神を中心とした恥の文化および自殺に関する研究がある。孫博(二〇一一)は日本社会の高い自殺率から研究を進め、日本人の死生観における独特な自殺観念について分析を行っている。孫によると、恥文化の影響で名誉を重視し、いったん破裂した名誉の回復を求めるために自殺を選ぶ日本人が多くいる一方、義理を尽くすために、死を破り、いのちを捨てることさえできる武士道精神も依然として大きな影響力を日本人の自殺観念に及んでいる。「集団利益のため、個人の全てを捨てるのは至上の光栄である」という。なお楊本娟(二〇一一)は自殺に対する日本社会の寛大さに着眼し、自殺という行為は責任から逃げることでなく、それとは逆に責任を負うことであり、個人道徳の昇華なのであるという日本人の考え方を語っている。「日本人にとって、死は一種道徳の回復を意味し、自律行為なのである…生前の罪とは関わらず、死んだら罪が消え、平等なる尊重と待遇が得られる」³。

日本人の死生観に対する中国人研究者の見地を上述の

ような三つのテーマから概観してきたが、一つ言える共通点として、死を消極的に捉えず、たとえば穢れとして見たり恐ろしい経験であったりするのではなく、心から死を積極的にあるいは冷静に受け入れる、死を褒めるといったポジティブな見方がほとんどの日本人の死生観に見つけ出せるという点である。

1 王玉芬「从《挪威的森林》管窥日本战后青年的生死观」(『フルウェイの森』から戦後日本人若者の死生観を見る)『大学教育』(二〇一三)

2 汤春萍「从《失乐园》透视日本人的生死观」(『失乐园』

日本人の死生観を探る)『南都学坛』(二〇二二)

3 杨本娟「武士道精神对日本人生死观的影响」(武士道精神が日本人の死生観に与えた影響)『理论探讨』(二〇一一)